

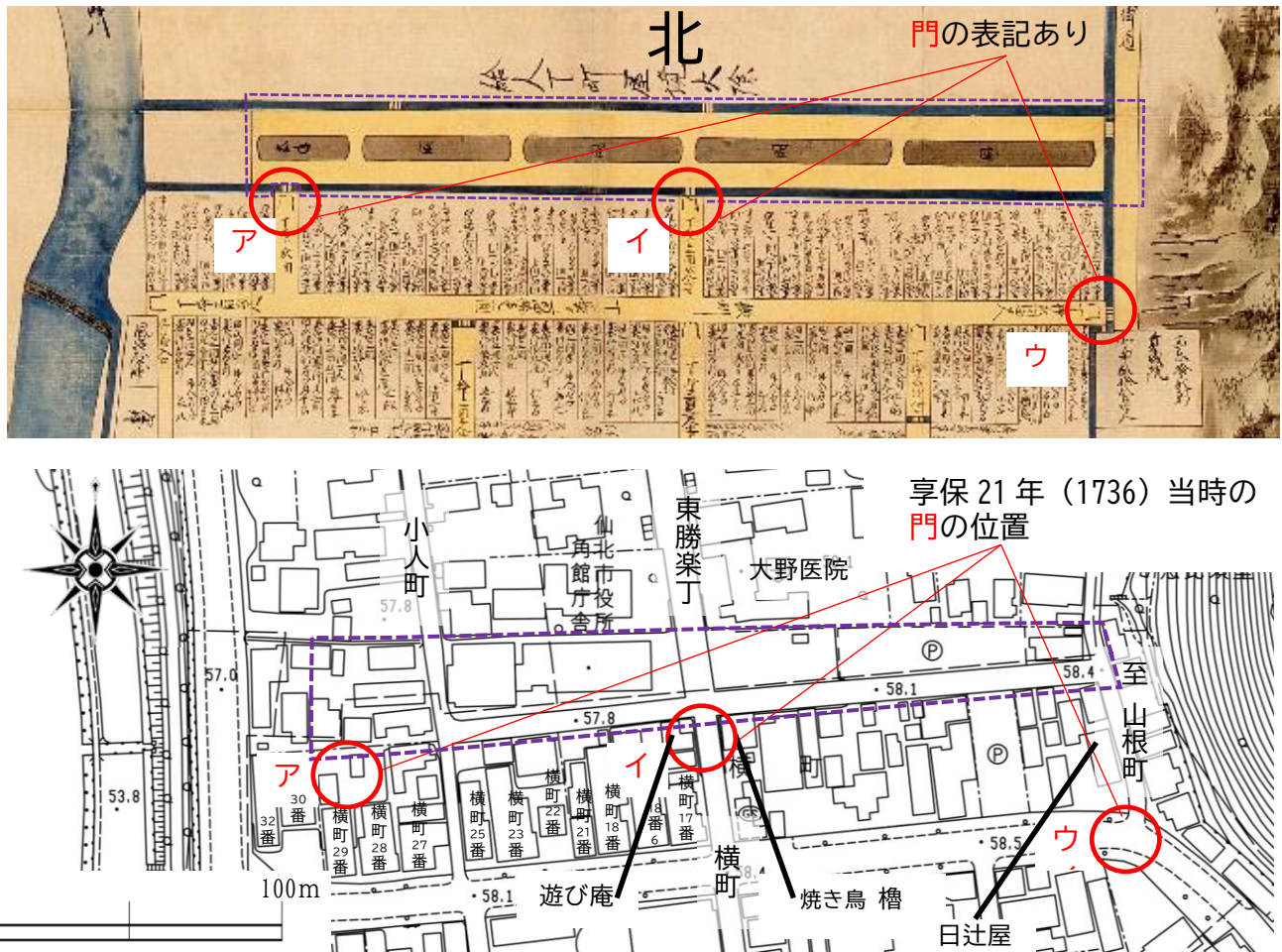
第Ⅲ章 火除けの構造

第1節 町割の中の火除け

今日の角館の町割は、第Ⅱ章第2節にあるとおり、芦名氏によってなされた。『角館誌』第二巻（「角館誌」刊行会 1965）には、この町割について次の様に記されている。「旧城址の西南の山麓、後年芦名邸となった地所を基点として、東方三十間（約五四メートル）の所に表町通りを、西方三十間（約五四メートル）測って河原町通りを設けた。この二本の道路が縄張りの主軸であった。表町の北端、旧城址の南麓から三百八十二間（約六八七メートル）、花場山と内川（現状よりもっと西方に延びている）が一番接近して平地を狭めている所に、東西の一線を引いて、北は武家屋敷、南は町家屋敷とし、この一線が火除地で幅十二間（約二メートル）、東西に百六十間（約二八八メートル）の空地を設けて縄張りの中心地をなしている。（中略）この線の南端が山と川に最も狭められていて、防砦を施すにもいちばん都合のよい火除けであったことが、これでよいと決定したものであろう。火除地は中央から少し南に寄って高さ一丈（約三メートル）の土塁を築き、完全に内町と外町を遮断した。」（234～235 頁）、「火除以北の町割り、は、芦名氏が芦名家みずからを護るために備えた苦心の作といえるようである。言い換えれば火除以北は一の城郭だと云う考え方であったようだ。」（236 頁）とあり、火除けの立地条件と、火除け以北の土地に関する軍事上の性格について記している。なお、藩政期の絵図（第2～5 図）では、火除けの形状はいずれも長方形で表現されているが、実際は東辺の長さが約 18 m、西辺の長さが約 36mの不整方形（面積約 7,000 m²）をなしている（第 13 図破線の範囲）。

第2節 門について

火除けに伴う門に関する情報は乏しいが、次の様な研究成果もある。平成 26 年度 張番協議会・責任者会議の際に、角館のお祭り保存会長 高橋雄七氏が作成した木戸と張番に関する資料によれば、「町を管理するため各町内の境に「木戸」が設置され、木戸番を置いて出入りを管理。侍町との境にある火除にも三ヶ所の木戸があった（小人町、勝楽丁、山根）。山車が町内から出ていることで、木戸の出入りと同じように「張番」を設置して祭典中の山車の運行を管理していたと考えられる。したがって「張番」が「山車」に対して持っている入町、出町に対する権限は古来からのものである。」（1 頁）とある。前述の「侍町との境にある火除にも三ヶ所の木戸があった（小人町、勝楽丁、山根）」とは、第 13 図におけるア・イ・ウを指し、これらが内町（武家町）と外町（町人町）の境界の役割を果たしていたといえる。木戸とは城塞等の出入口にある屋根のない開き戸が付いた木の門で、江戸時代には武家町と町人町の境にもあった。



第13図 火除けに伴う門の位置

上 『享保二一年角館惣町（外町）絵図』（部分）享保21年（1736）完成 に加筆。

下 『仙北市都市計画図』仙北市 平成24年（2012）完成 に加筆。

横町28番地と横町29番地の間には南北方向に延びる道があったと、それぞれにお住まいのお年寄りの方々の証言がある。道の名残と捉えられる空間を現在も見ることが出来る。



第14図 火除けに伴う門付近の現在

左 横町28番地と横町29番地の北側（第13図中のア地点） 東から撮影。

中 焼き鳥 櫓と遊び庵の間（第13図中のイ地点） 北から撮影。

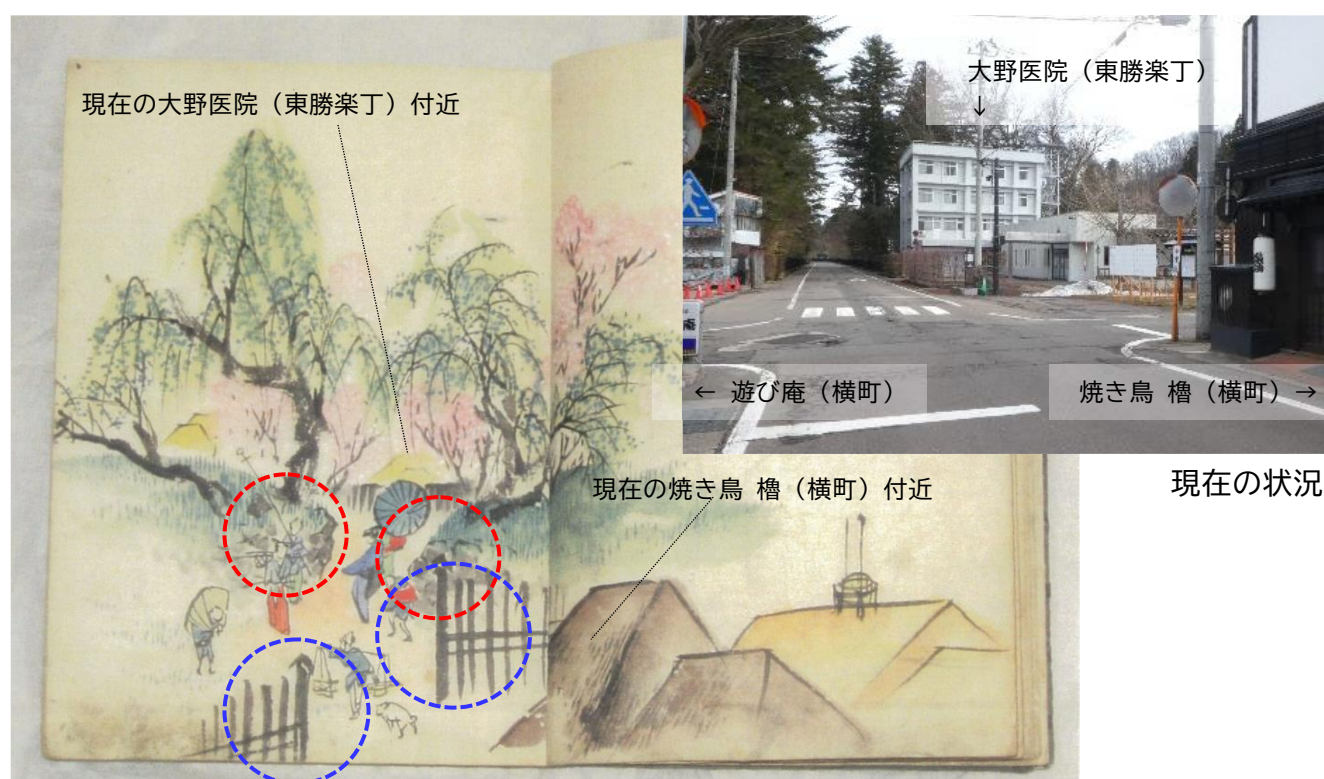
右 日辻屋、花場印刷所付近（第13図中のウ地点） 西から撮影。

明治初期の作品で、『田沢湯元道中画報』角館町其二の場面に火除けを描いたものがある（第15図）。土塁が左右の両側から中央に向かって迫り、それが途切れた位置には奥へ通じる道路、

土塁が途切れた双方の先端部には崩落防止の石垣、奥には内町の黒板塀と屋敷屋根、手前には内町と外町を区切る目的で設置された柵門がある。土塁の下では槍持を共にした武者が帯刀しながら歩き（廃刀令は明治9年（1876）に公布）、その他、2人の女性や天秤を担いだ男性、犬も見ることが出来、藩政期の火除けの面影を偲び得る作品である。

途切れている土塁や門、奥に黒板塀や屋敷屋根を確認出来るため、現在の“店舗 遊び庵”と“店舗 焼き鳥 櫓”、“大野医院”（第6・13 図）が隣接する十字路を、南から北へ向かって描いた図であると考えられる。また、19 世紀に書かれた『鳥帽子於也』の一節に、「両側並フ糸サクラ 火除ノ土手ノ糸柳」との記述もあり、第15 図の内容に一致する。

この作品によって、幕末から明治初期にかけての門の形は柵門であったことが分かる。

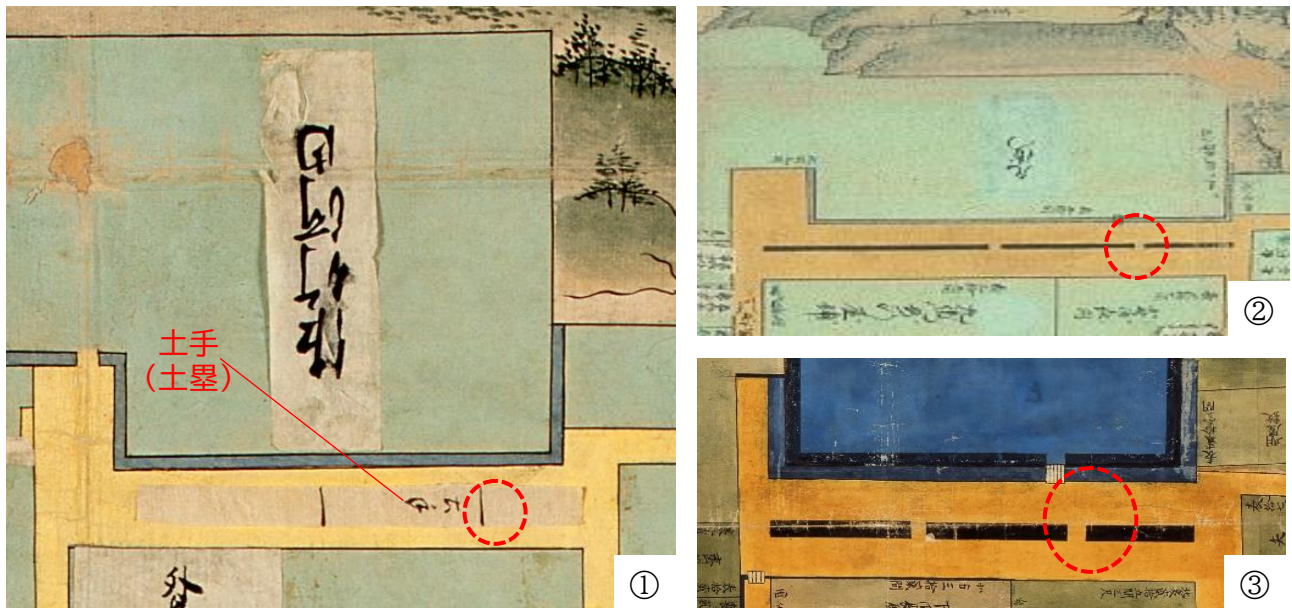


第15 図 大坂東岳『田沢湯元道中画報』秋田県指定有形文化財角館町其二（部分）に加筆。
図中の赤色破線部分は土塁養生用の石垣、青色破線部分は柵門（第13 図イ）と捉えることが出来る。

第3 節 土塁について

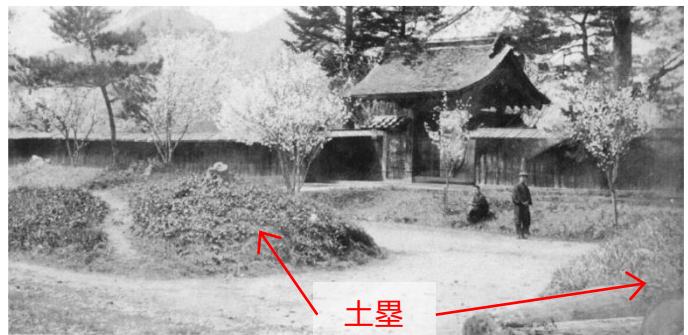
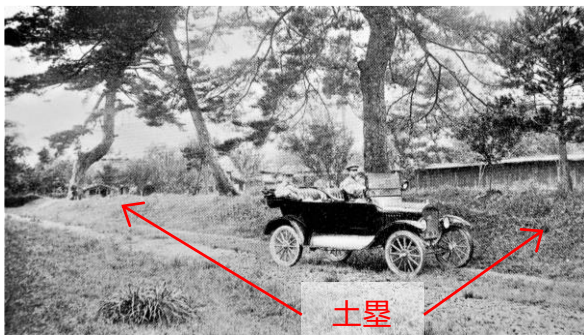
火除けの土塁に関する情報は、藩政期に描かれた絵図（第2～5 図）や、『角館誌』第二巻（「角館誌」刊行会 1965）にある「火除地は中央から少し南に寄って高さ一丈（約三メートル）の土塁を築き、完全に内町と外町を遮断した。」（235 頁）との記述から得られるものが主である。

また、旧佐竹北家邸（第6図②）前にも土塁が存在していたことが、藩政期に描かれた絵図（巻頭図版2、第16図）の他、古写真（第17図）からも知ることが出来る。



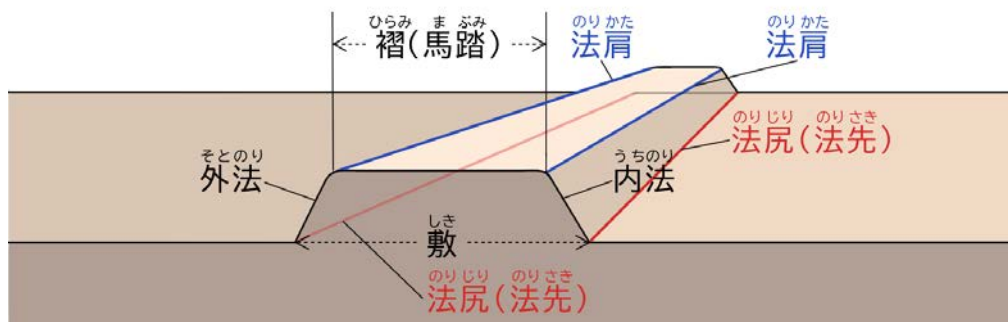
第16図 藩政期の町割絵図に描かれた佐竹北家邸前の土塁

- ① 『寶永元年角館士民居所図』元禄17年（1704）完成 仙北市指定有形文化財（部分）に加筆。
 - ② 『仙北郡角館（秋田領給人町）絵図』享保13年（1728）完成 仙北市指定有形文化財（部分）に加筆。
 - ③ 『万延元年角館内町絵図』万延元年（1860）完成 仙北市指定有形文化財（部分）に加筆。
- 図中の赤色破線○印は第17図右側写真の撮影位置を指す。



第17図 佐竹北家邸前の土塁

- 左 旧佐竹北家邸前 大正8年（1919）撮影 『角館誌』第五巻「角館誌」刊行会 1973（部分）に加筆。
- 右 個人蔵写真 旧佐竹北家邸御門 大正期撮影（部分）に加筆。



第18図 土塁の各部の名称

この古写真を見ると、旧佐竹北家邸前に築かれた土塁は、“叩き土居”や“芝土居”であることが推定出来る。叩き土居とは粘土や小石を土に混ぜて突き固めて築いたもの、芝土居とは法面の崩落を防ぐために芝を植えて築いたもので、芝は根が張ると土を押し固める効果があり、叩き土居より法面（斜面）の傾斜を急角度にすることを可能にしている。

高さは別として、火除けの土塁の形状等は旧佐竹北家邸前に築かれたものに準ずる可能性がある。発掘（試掘）調査によって土塁の断面や法尻、法尻間の距離である敷の部分を検出出来れば、土塁を復元するにあたっての重要な根拠に成り得る（第 18 図）。

第 4 節 水路について

『細越峠から山ノ根を歩いて』（佐土忠 1991）には、「中央に高さ 1 丈（約 3 米）の土塁を築き柳や桂を植え、両側の堰は 1 間巾で大威徳石で縁をとり山根方面から流れてきた清水で一杯であった（小松氏覚書から）」（9 頁）との記述がある。

現在も火除け地の南端と北端に東から西へ流れる水路があり（図版 10-1～4）、その所々に大威徳石（大威徳山で採れる安山岩）を積んだ護岸（附図 1、第 19 図）を確認することが出来る。現状ではそれらの護岸用石垣が藩政期まで遡る時代の遺構という根拠はないが、発掘（試掘）調査によって藩政期の水路の幅や深さを始めとする構造が明らかに出来る可能性がある。



第 19 図 大威徳石を積んだ水路護岸用の石垣

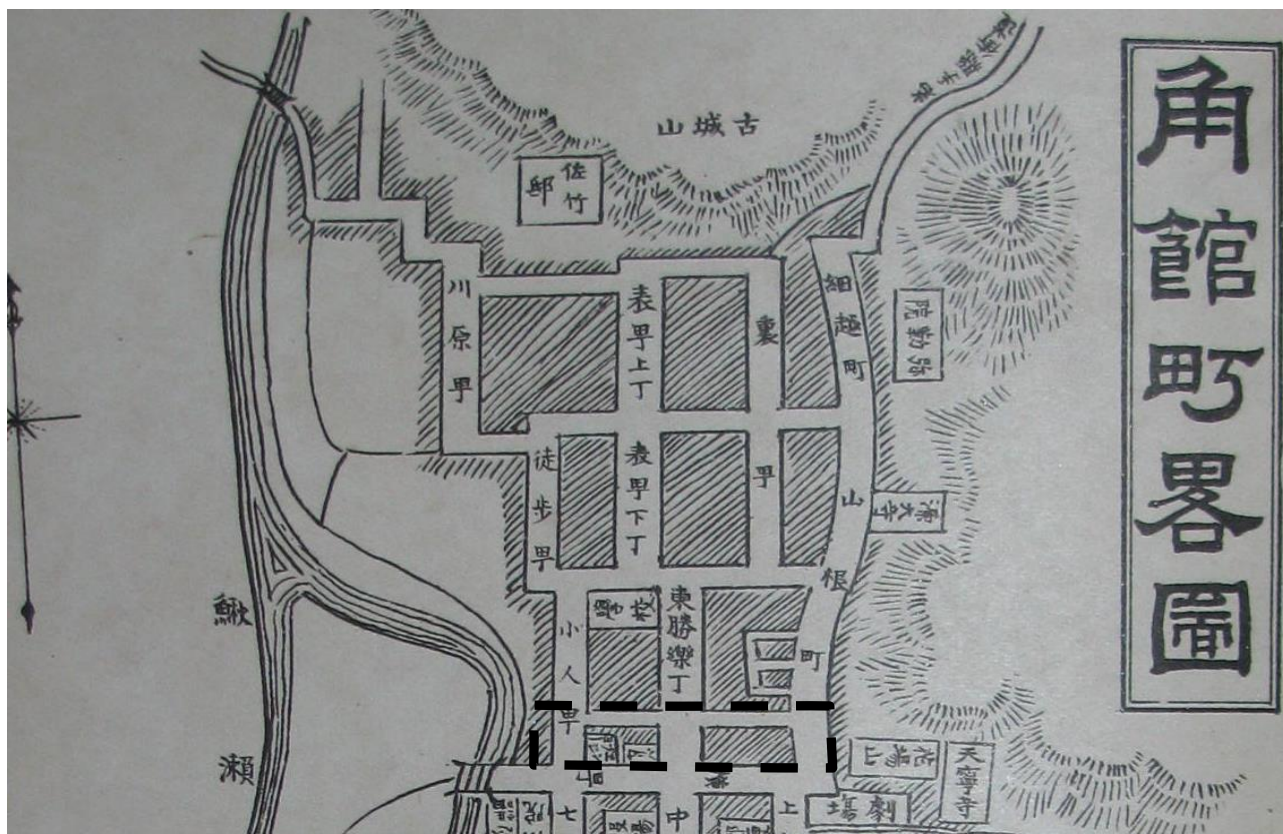
左：試掘坑 D 付近、中：試掘坑 E 付近、右：試掘坑 I（南端）付近。
赤色破線○印内が石垣露出範囲。

第 5 節 道路について

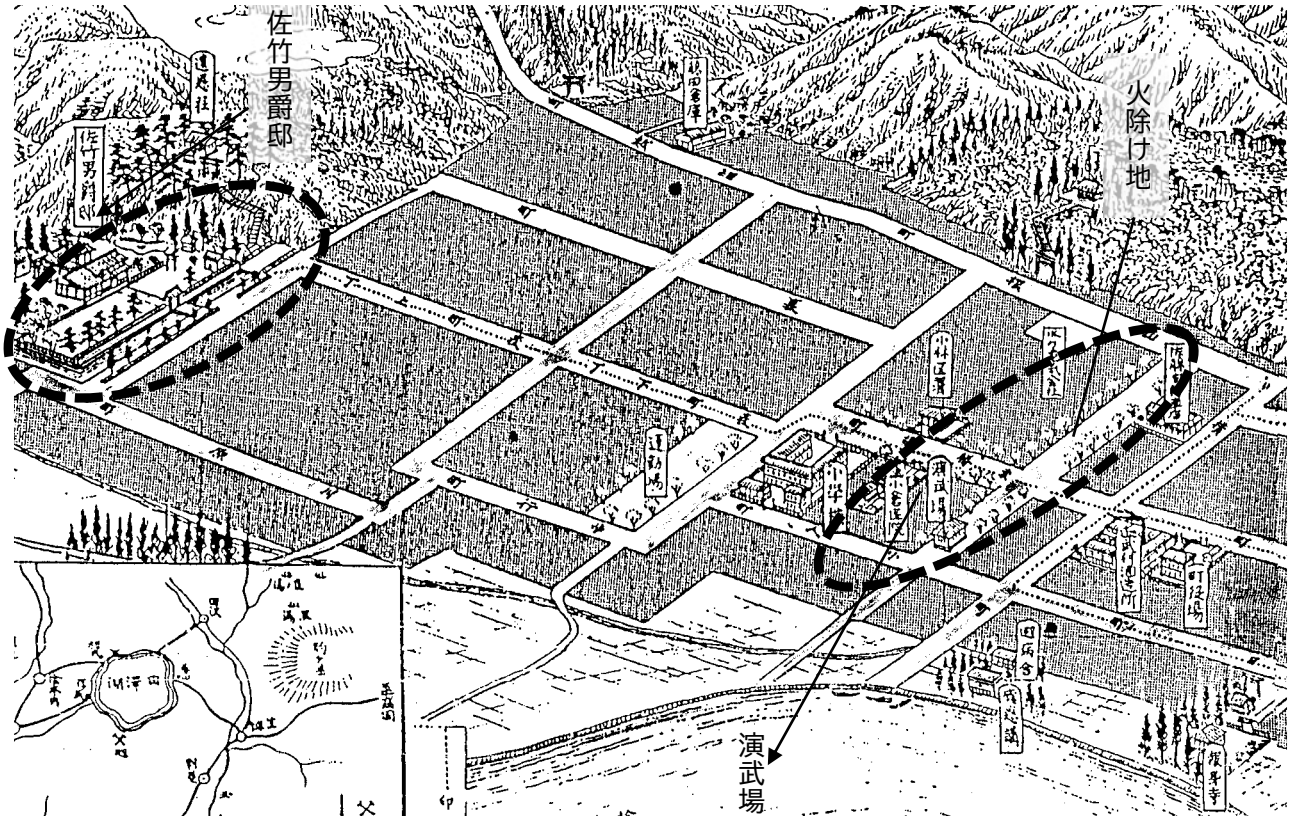
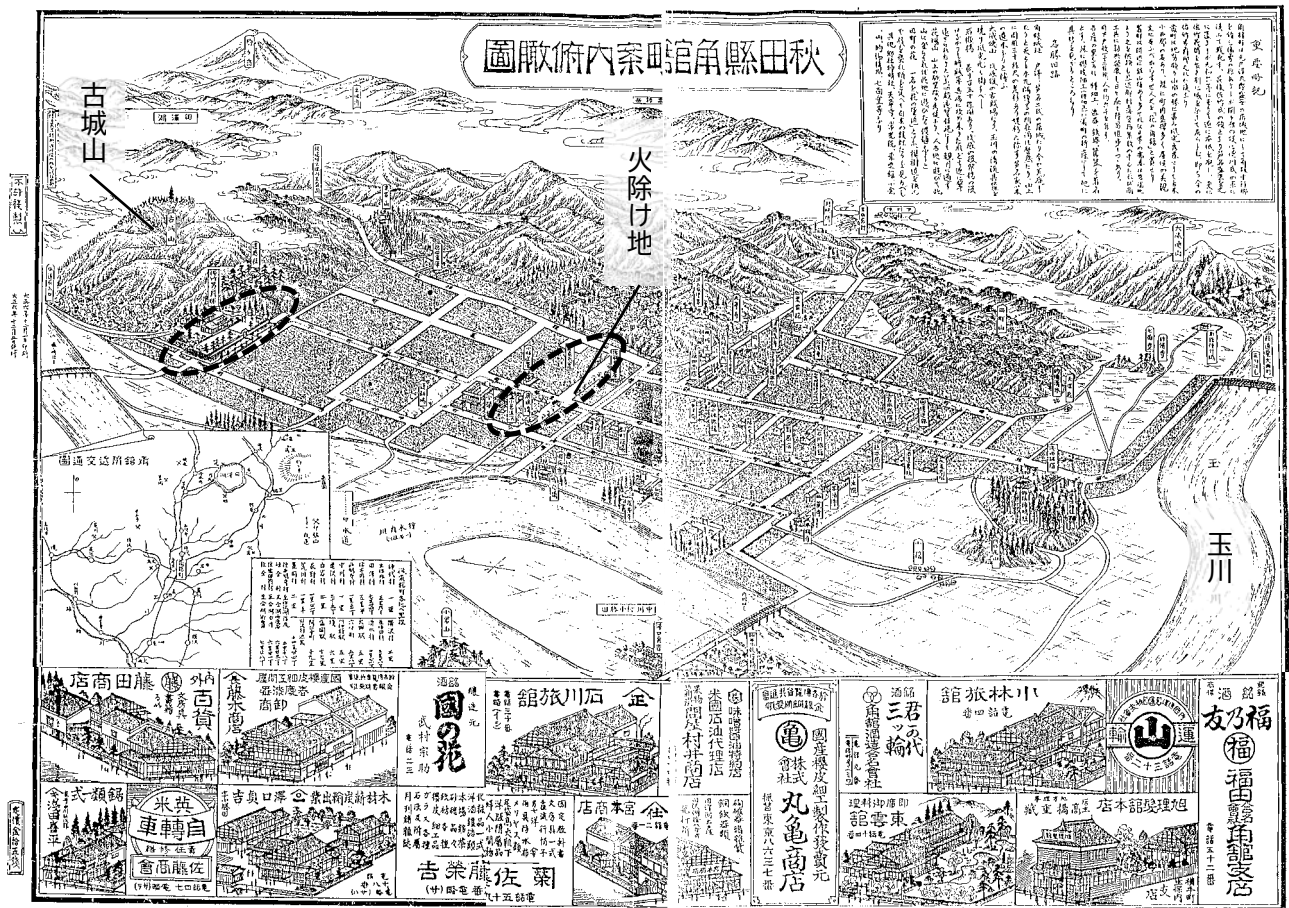
火除け地において、道路というと南側を東西方向に延びる市道火除東線と市道火除西線（附図 1、第 6 図、図版 10-5・6）が馴染み深いのが、かつての道路の位置は現在のものとは異なっており、藩政期から昭和初期までは逆の北側にあり東西方向に延びていた（第 2・22・23・35 図）。藩政期における道路を復元し得る情報は現状では乏しいが、発掘（試掘）調査によって藩政期の路面の高さや構造が明らかに出来る可能性がある。

第6節 近代以降の火除け地

近代以降、火除け地はその姿を変えていく（第20～24図）。



第20図 遠藤清編『角館案内』（部分）の中の火除け地
明治42年（1909）宮本商店発行 に加筆。
下図は上図の火除け地範囲（黒色破線内が火除け地）付近を拡大したもの。
“エンブジョー（演武場）”“セリバ（競り場）”と記載がある。

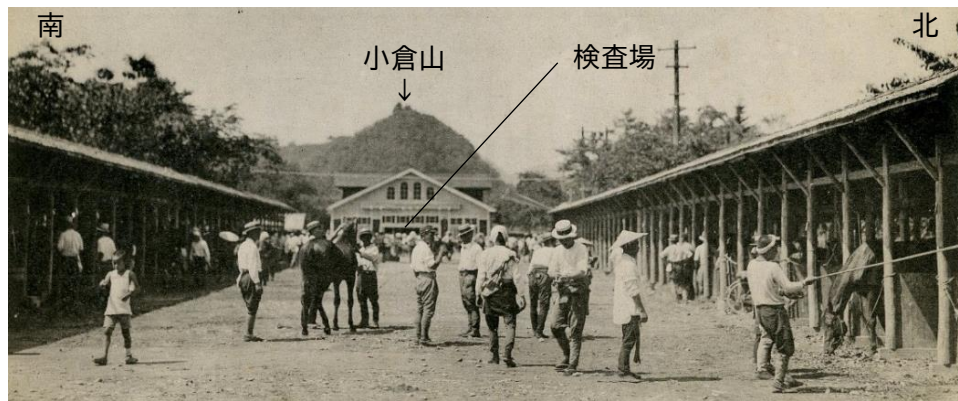


第 21 図 『秋田県角館町案内俯瞰図』（部分）の中の火除け地

大正6年（1917）発行に加筆。

下図は上図の角館町北側を拡大したもの。

火除け地には“演武場”と記載があり、“佐竹男爵邸（旧佐竹北家邸）”前には土塁と堀が描かれている。



第22図 火除け地の西側（仙北市東勝楽丁庁舎跡地から西側庁舎跡地にかけて）

上 公堂（旧制角館中学校第1期生卒業アルバムより）大正14年（1925）個人蔵（部分）に加筆。
東方向から撮影。右側（黒色破線部分）が当時の道路であり、現在の市道火除西線と南北逆の位置にある。
公堂は暫定的に旧制角館中学校仮校舎となっていた時期があった。

中 絵葉書「角館馬市ノ盛況」昭和17年（1942）個人蔵（部分）に加筆。

下 絵葉書「小人町ヨリ市場後面ヲ望ム」昭和初期 個人蔵（部分）に加筆。

小人町側から南東方向へ撮影。左側（黒色破線部分）が当時の道路であり、現在の市道火除西線と南北逆の位置にある。



第 23 図 公堂と跡地（西側庁舎跡地付近）

- 上 個人蔵写真 公堂と私立角館幼稚園園児 昭和初期撮影（部分）に加筆。
 道路上で園児がバンザイをしている。現在の市道火除西線と当時の道路が南北逆の位置にある。
 生垣下部に大威徳石と捉えられる石垣がある（黒色破線部分）。
 下 上写真と同位置の現在（東から撮影）。



第 24 図 自治体警察署

『角館誌』第六巻 「角館誌」刊行会 1975 に加筆。
 自治体警察署とは角館警察署のことを指し、昭和 24 年（1949）に火除け地の東側へ新築された。

《 角館警察分署、角館警察署について 》

- ・ 明治 13 年（1880）、東勝楽丁 18 番地（火除け地東側／第 35 図上の東勝楽丁 18 番ノ 1）に角館警察分署を新築する。
- ・ 明治 33 年（1900）の大火により焼失し下中町に移転し、更に明治 36 年（1903）、上新町へ移転する。
- ・ 大正 15 年（1926）、角館警察署に改称。
- ・ 昭和 24 年（1949）、角館警察署を火除け地に新築する。

その他、近代以降の火除け地に関する記述で主なものは下記のとおりである。

第1表 近代以降の火除け地に関する記述

出典	年月日	内容
『角館誌』第六巻		昭和期の産業について…角館町の火除けは、明治以降セリ市場と仙北郡二歳駒品評会会場で知られた。角館火除市場となる建物は、旧角館町で公堂と呼ばれたが、この期に至っては既に老朽甚だしく、昭和11年2月折柄私立角館幼稚園の園舎に貸し付けていた所、危険建物として使用禁止になった。
		県立高等女学校について…昭和に入って角館町は県立高等女学校設立に成功した。
		県立高等女学校について…本校舎竣工までの間、町営公堂を仮校舎に使用する。
		県立高等女学校について…火除の仮校舎を引き払って小館の新校舎に引っ越したのは、昭和5年9月1日であった。
『角館時報』	大正13年 3月 15日	中学（現角館高等学校）仮校舎は火除公堂と決定
	昭和3年 4月 25日	高女（角館高等女学校）第1回の入学式 火除公堂の仮校舎にて
	昭和11年 8月 29日	角力稽古に火除に土俵
	昭和12年 6月 11日	火除公堂愈二十日限り取解し樺工組合で落札
	昭和13年 6月 23日	愈々着工する火除の常設厩舎 70頭分建築決定
	昭和13年 6月 29日	火除厩舎工事入札 河原田氏落札
	昭和25年 3月 5日	火除の桜咲く
『新北仙』	昭和28年 8月 2日	失業対策事業 火除両側用悪水路を工事
『北仙民友』	昭和32年 4月 26日	火除の桜赤らみ始める
	昭和34年 7月 29日	役場庁舎近く着工 火除簡易裁判所取壊し跡に

以上と附図1の内容を踏まえると、近代以降の火除け地の東側は、角館警察分署、角館警察署、角館図書館、公用車車庫、防災施設（地下貯水槽・ポンプ室）等として、一方の西側は、演武場、公堂、馬の競り市場、旧制角館中学校仮校舎、県立角館高等女学校仮校舎、私立角館幼稚園園舎、簡易裁判所、角館町役場（後の仙北市東勝楽丁庁舎）、角館公民館（後の西側庁舎）等として利活用されたといえる（附図1、第10～12図、図版1-1）。

〔挿図出典〕

第 13 図：上＝個人蔵 1736 『享保二一年角館惣町（外町）絵図』

第 15 図：大坂東岳 明治初期 『田沢湯元道中画報』角館町其二

第 16 図：① 個人蔵 1704 『寶永元年角館士民居所図』

② 個人蔵 1728 『仙北郡角館（秋田領給人町）絵図』

③ 個人蔵 1860 『万延元年角館内町絵図』

第 17 図：左 「角館誌」刊行会 1973 旧佐竹邸前・自動車はフォード T 型『角館誌』第五巻（368 頁）

右 個人蔵写真 大正期 「旧佐竹北家邸御門」

第 20 図：遠藤清編 1909 「角館町略図」『角館案内』

第 21 図：作者不明 1917 『秋田県角館町案内俯瞰図』

第 22 図：上 角館中学校 1925 『角館中学校第 1 期生卒業アルバム』

中 個人蔵絵葉書 1942 「角館馬市ノ盛況」

下 個人蔵絵葉書 昭和初期 「小人町ヨリ市場後ヲ望ム」

第 23 図：上 個人蔵写真 昭和初期 「公堂と私立角館幼稚園園児」

第 24 図：「角館誌」刊行会 1975 写真 自治体警察署『角館誌』第六巻（289 頁）

〔引用・参考文献〕

「角館誌」刊行会 1965 『角館誌』第二巻

「角館誌」刊行会 1975 『角館誌』第六巻

角館時報社 1924～1950 『角館時報』

佐土忠 1991 『細越峠から山ノ根を歩いて』

新北仙社 1953 『新北仙』

須藤半五郎 1823 『烏帽子於也』

高橋雄七 2014 『「木戸」と「張番」』

北仙民友社 1957～1959 『北仙民友』